

# 「文書偽造」の文学

花田清輝の歴史小説

佐藤泉

## 歴史批判

本稿では花田清輝の『鳥獣戯話』を偽装ノンフィクションという仮設を手掛かりに、「歴史小説」に対し批判的な介入を試みた作品として読み進める。『鳥獣戯話』は、『甲陽軍艦』や『武田三代軍記』といったさまざまな歴史資料からの引用をもとにして武田信虎像を詳細に分析しており、史実から根拠を引いてくる評論の形式（ノンフィクション）をとっている。ところが、作者は、こうした実在する史書と同一平面上に武田信廉の『遣遥軒記』なる古書、そして「カルモナ書簡集」といった「偽書」をも忍ばせている。『鳥獣戯話』はノンフィクションの文体を採用したフェイクノンフィクションなのである。他の史料と同じ地平で引用される偽「史料」はあまりにいかがわしい。とはいえ、歴史研究を行うにあたって史料批判が不可欠であるように、「実在する史料」が常に安定的に「歴史の真実」を伝えているとはかぎらないことも一方の事実である。

花田もまた史料が存在すること自体の基盤に権力の問題があるという観点から、史料の信憑性に対し懐疑的だった。いわゆる「実証主義的」な歴史とは文字による史料に基づいて書かれるが、文字を独占し歴史を残し得たのは結局ところ常に支配階級だった。だとすれば史料とは支配階級の史料であり、歴史とは権力の歴史にすぎない。史料・歴史は過去の「客観的な事実」に根差すという信念がまずは疑わしいものなのだ。一方で、大衆の間に語り継がれてきた口承の伝統には、いわゆる客観的歴史を逆なでし、歴史そのものによる過去の隠ぺいをこじ開ける視点が含まれているのではないかというのが花田の歴史への問いとなる。

『鳥獣戯話』が発表された時代は、歴史小説ブームの時代であり、NHK 大河ドラマがスタートした時代だった。大衆のメディアを通して形成される歴史のイメージを通して、人々は「英雄」と呼ばれる人物の功績を顕彰してきた共同体への帰属を確認し、自己の来歴を物語ることになるのかもしれない。選択的に構成される来歴において「歴史」に名前の刻まれることのなかった死者は忘却されることになるだろう。花田にとって同時期の歴史小説は「本当らしい嘘」であり、これに対して書かれたのが歴史小説批判の歴史小説『鳥獣戯話』だった。

花田は、歴史小説という「物語」のみならず「実証主義」的な歴史もまた文字の独占をなしたものの「物語」だという認識に立つ。文書史料を残し歴史を語る権限はこれまででもっぱら前者に掌握されてきた。それは暴力による勝利者の歴史であって、文字と権力が結託するこの地平にあっては、史料が存在しないのだから事実は存在しなかった、という姿勢は「実証的」であるかにみえて実際には権力の無自覚な追認に等しい。必要なのは、史料を残すことができたのは誰なのかという問いであり、それが文書史料を残さなかった民衆、女性、そして非暴力の歴史の始まりとなるだろう。この作品には文字の「史料」を残すことのなかったものたちによる潜在的な歴史がつねに存在していたのではないかという問いが潜在している。歴史を語ることがただちに暴力の歴史を語ることにしかならないような歴史認識の枠組みを疑い、歴史表象の限界に立って、他の歴史を創出しようとする紛れもなく積極的なフィクションだったのだ。

## 暴力批判

暴力の勝利者の歴史は、人々に支配的な権力への想像的な同一化を強いる。そして勝者への感情移入は時々支配者にとっていつでも都合なことである。同一化の装置である歴史表象の内に潜在するこの暴力性を解体するものとして登場する『鳥獣戯話』の主人公＝武田信虎は、息子信玄によって国を追放されたのち、無人斎道友と称して將軍付きの「御伽衆」に転身し、非暴力の、つまり言葉の戦略によって暴力の歴史を解体すべく策をめぐらすことになる。花田はソレルの『暴力論』を参照しつつ、非暴力手段によってどこまでも暴力に抵抗する行動、労働者によるストライキに注目し、それを可能にする「群れ」の動きを描き出す。題名の通り『鳥獣戯話』の真の主人公は、群れとなって整然と行動する猿たちだといえる。非暴力は無力、無抵抗を意味するのではなく、ある契機において積極的抵抗へと接続する。この転換によって、いわゆる「歴史」の中に表象されることのなかった非暴力が力に転じることになり、今このようにある現実ではない別の現実が見いだされるのである。そして非暴力を積極的抵抗に転換させる契機となるのが群れであり集団である。花田の想像力はつねに動物とプロレタリアートを、群れ、集団という姿において重ねて捉えた。それによって名武将でも英雄でもない、民衆の群れとしての知を歴史の中から掬い取ろうとしていたのである。